

## トピック ― 平成26年の指定野菜の卸売価格動向の特徴 ―

今回は、昨年の指定野菜の価格動向の特徴を振り返る。

指定野菜14品目の卸売価格（東京中央卸売市場）は、1月、2月は低温や記録的大雪もあり平年を上回った後に下落傾向であったが、8月、9月には高温・干ばつ、局地的な大雨・低温等から平年を大幅に上回った。その後、10月、11月には好天に加え、先発産地と後続産地の出荷が重なり、一転して平年を大幅に下回るなど、平年にない大きな変動となった。

品目別にみると、例えば、はくさいは、8月、9月は主産地の長野産が台風後の長雨と曇天の影響等から高騰したが、10月以降は後続の茨城産の豊作基調等も加わり価格は低迷した。

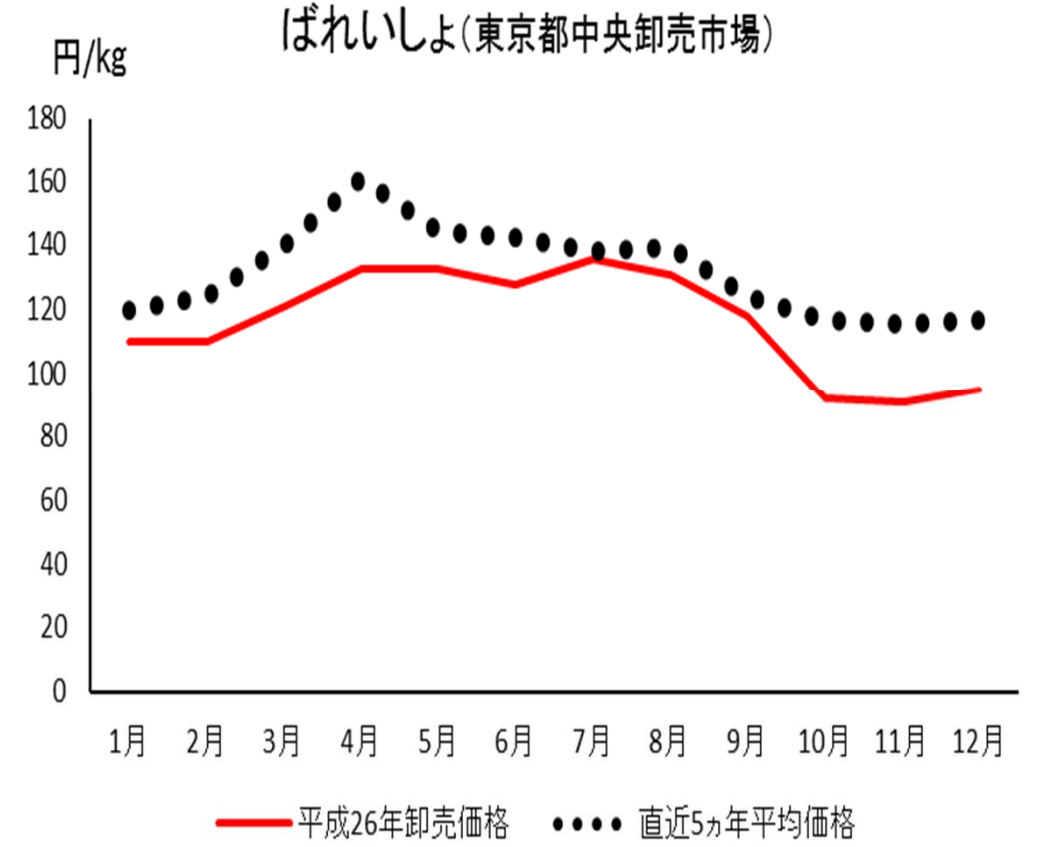
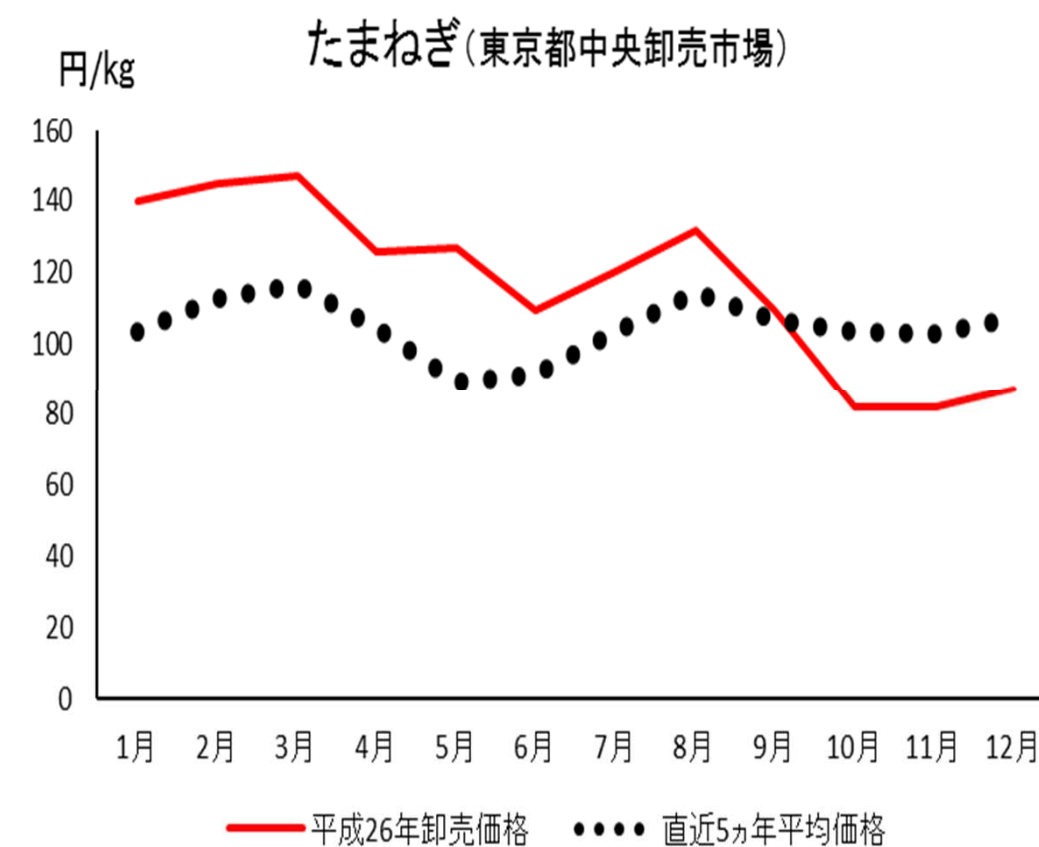
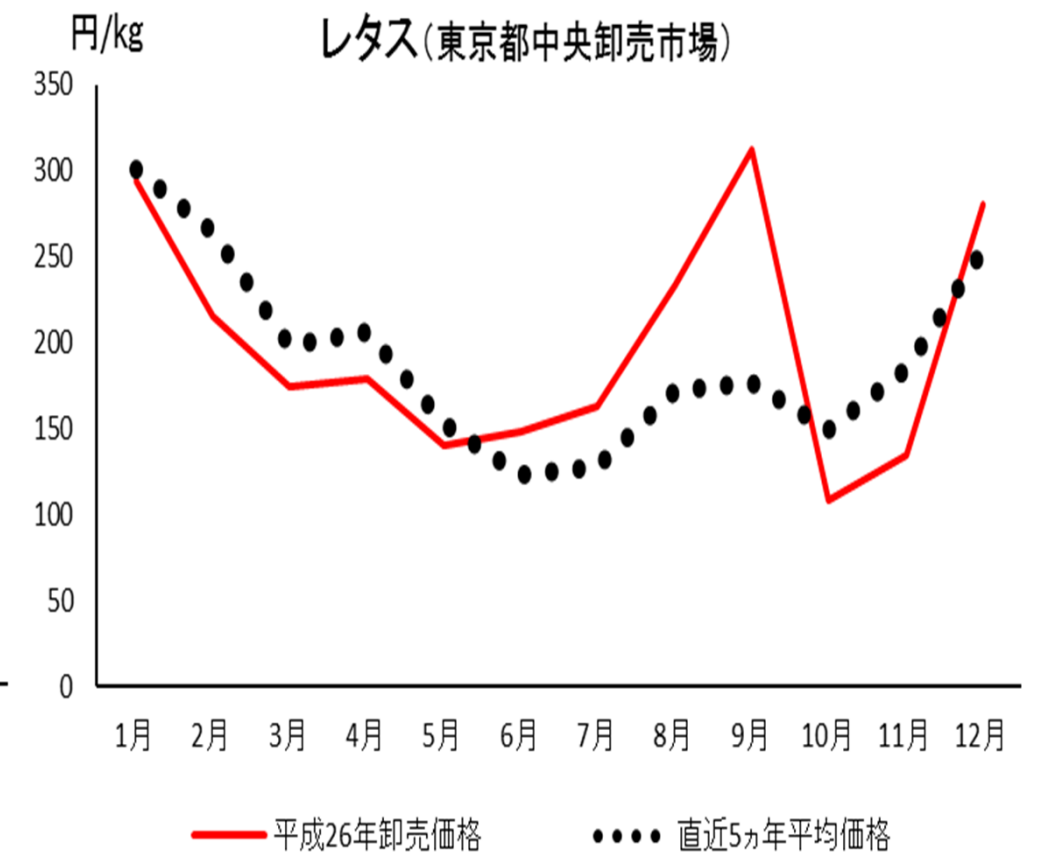
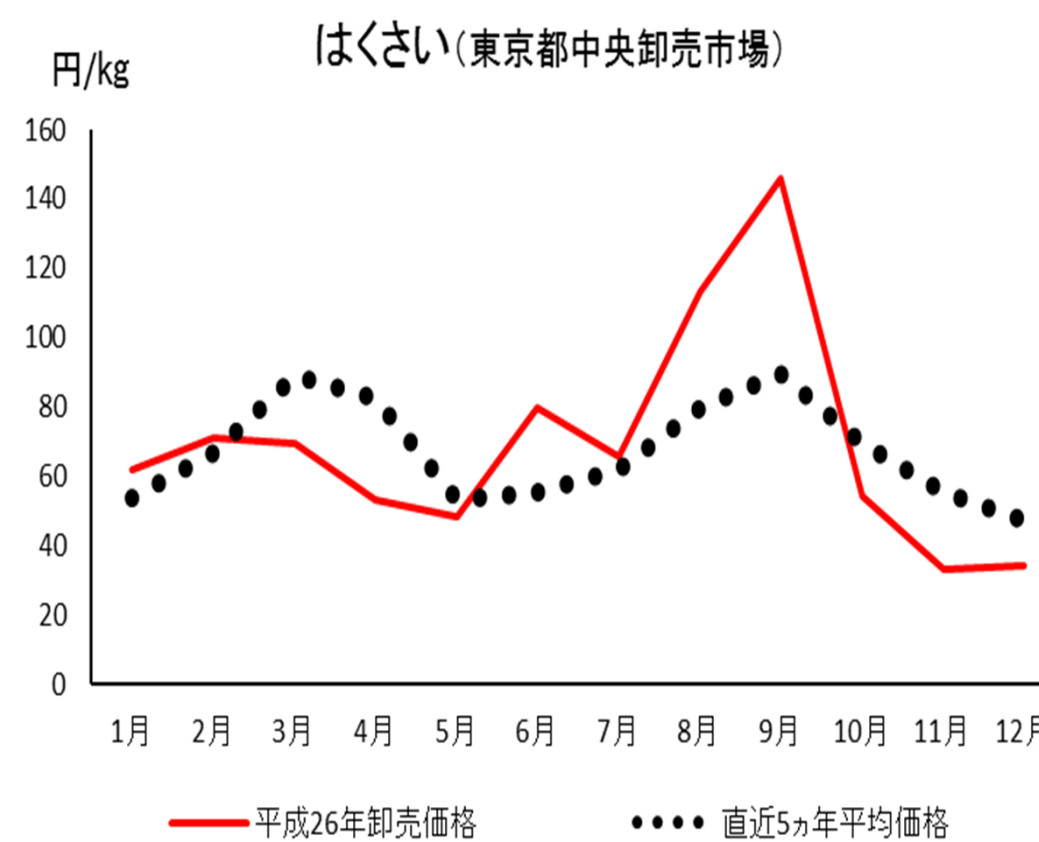
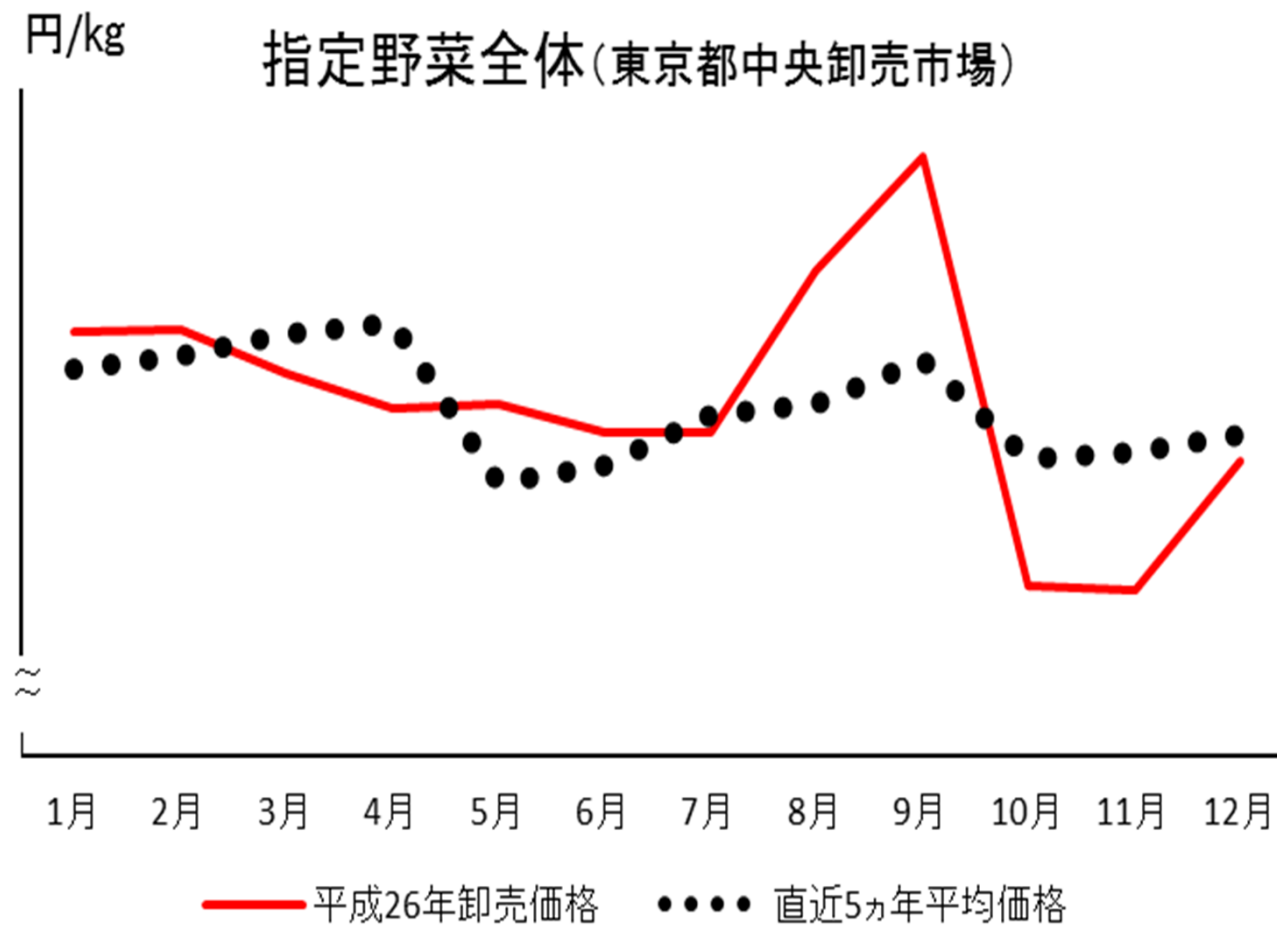
レタスは、主産地の長野産が同様に8月、9月に高騰した後、10月、11月は後続の茨城産の潤沢な出荷も加わり低迷したが、端境期となった12月には寒波による静岡産の生育停滞等から再び高騰した。

このように一部の葉茎菜類では価格の乱高下が見られたが、例えば、主産地シェアが高く貯蔵品出荷も多いたまねぎやばれいしょでは、主産地の作柄の良否で規定された価格水準が一定期間続いた。

たまねぎは、1月～8月は、前年収穫の北海道産、後続の佐賀県産がともに不作のため高値が続いたが、10月以降は北海道産の作柄が良好となり平年を下回った。

ばれいしょは、1月～3月に出回る前年収穫の北海道産、4月～6月の鹿児島産や長崎産、9月以降の北海道産がいずれも作柄が良く、年間を通して平年を下回った。

気象変動が野菜の需給・価格に与える影響度合いは、品目毎に自ずと異なるが、その軽減を図るためには、作柄安定化や産地の分散・連携、カットも含めた販売ロットの変更、代替品の調達・購入、的確な需給見通しの提供など、産地、消費・実需側双方の取組が重要である。



資料：農畜産業振興機構「ベジ探」、原資料：東京都中央卸売市場「市場月報」

●問い合わせ先 独立行政法人農畜産業振興機構 野菜需給部 需給業務課 前川、河原、斎藤、海老沼 TEL03-3583-9483、FAX03-3583-9484 ご意見、ご要望をお寄せください。

◆「野菜の需給・価格動向レポート」は月2回公表しています。公表時にメルマガでお知らせしますので、ご希望の方はベジ探のトップ画面、メルマガ配信登録・解除ボタンから登録してください。

★この「野菜の需給・価格動向レポート」は、[http://vegetan.alic.go.jp/vegetable\\_report.html](http://vegetan.alic.go.jp/vegetable_report.html) に掲載しています。